『千葉大学 ユーラシア言語文化論』22（2020）：315-331

英語における不定冠詞の使用方法について
－日本に滞在する中国人留学生と日本人学生を研究対象に－

エンシンイ
YAN JINYI
閻 津漪

キーワード：定冠詞、不定冠詞、冠詞誤用、英語、第二言語

はじめに

本研究は、英語の不定冠詞の用法に、主としてどのような誤用問題が生じるかを研究目的とする。日本に滞在する中国人留学生と日本人学生を研究対象にした。母語（L1）に冠詞が存在しない日本語話者と中国語話者にとって、第二言語（L2）としての英語の冠詞習得は難しい。L2 英語話者である日本人学習者と中国人学習者が、生来の L1 英語話者が身に付ける冠詞用法の知識を内在化することは容易ではない。そのため日本人学生と中国人留学生にとって、英語を学習する時、冠詞を正確に運用することは重要なポイントとなる。

本文の第 1 節は冠詞の定義をはじめ、冠詞の分類を紹介する。第 2 節は不定冠詞、定冠詞と無冠詞の意味と性質を紹介する。第 3 節では、語用論の角度から冠詞の「定」（definite）と「不定」（indefinite）を定義し、第二言語習得における冠詞の習得を紹介する。第 4 節と第 5 節は筆者が（YAN,2019）で行った調査をまとめ、不定冠詞誤用の一般的根源、学習者自身の原因と外部原因から不定冠詞の誤用要因を分析する。そして、将来の教育分野での応用を見通し、英語の不定冠詞習得に関する基礎研究はさらに重要であると提案する。第 6 節は最後のまとめになっている[1]。

1. 冠詞の分類

劉（2013）は冠詞を次の様に定義している。冠詞（article）は典型的且つ重要な限定詞であり、機能語でもあるので、単独に使用することなく、名詞の前に付くことで当該名詞の意味を説明する。現代の文法では、冠詞は不定冠詞（indefinite article）「a/an」、定冠詞（definite article）「the」、無冠詞（zero article）という三種類に分けられる。不定冠詞 a/an は one に

[1] 本稿は著者が 2019 年度に千葉大学大学院人文公共学府に提出した修士論文の一部を加筆・修正したものである。

一致しており、子音の前で a を付ける。定冠詞 the は this や that と類似している。冠詞が付かない場合は無冠詞と呼ぶ。

冠詞の表意機能は、総称指示（generic reference）と特定指示（specific reference)という二種類に分けられる。総称指示とは、一種類の人間或いはものを指して種類を表すことである。定冠詞、不定冠詞と無冠詞はいずれもこうした機能を備える。不定冠詞は単数可算名詞と組み合わせることで種類を表示できる。また特定指示とは、一種類の人間或いはこの種類の人間における具体的な対象指示であり、下記 2 種類に分けられる。即ち、誰か或いは何物かをはっきりと指す「特定の特定指示（definite specific reference）」（定冠詞は常にこの用途で使われる）や、具体的な対象を指すが、それほど明確ではない「非特定の特定指示（indefinite specific reference）」（不定冠詞は常にこの用途で使われる）である。

一方、名詞の機能から見た冠詞の用法について Huebner（1979）をもとに述べると、一つ目には名詞が特定の指示対象を持つか否か、二つ目には聞き手或いは読み手がその名詞を同定できるか否か。この二つの判断によって、使われる冠詞が決まることができるという。Huebner（1979）は、前者を“specific reference”が持つかどうかという意味で［±SR］とし、後者を聞き手がすでに知っているものについてか否かという意味で、“assumed known to the hearer”［±HK］としている。冠詞選択に関わる要因は定性（definiteness）、同定性（identifiability）、特定性（specificity）だけではなく、冠詞後の名詞の属性という言語的な要因が含まれる。

2. 冠詞の意味と性質

一色（1954）は、冠詞の意味を次のように述べている。冠詞とはギリシャ語の arthron のラテン語訳 Articulus に語源を持ち、結合（joint）を意味する。名詞などに結びつき、軽い限定語（determinative）としての機能を表すものであるという。

自国語に冠詞を持たない日本人と中国人にとっては、冠詞の使用問題は特に困難であると思われる。冠詞を付けるべきか、あるいは冠詞を付けない方がよいのか迷う場合が多い。英語を母語とする人々の間でも、同じ文或いは同じケースで意見が分かれる状況がかなりあり、それぞれが自分の使用方法に間違いがあることに気づかない例がある。また英語と母語両方とも日常でよく使う人が、同じことを言う時にさえ、ときにより冠詞の使用方法が異なっていることもある。結局は伝統とか、その人の好みとか、または文体とから説明するよりほかはない事例もかなりあると認識する必要がある。

2.1 定冠詞の意味と性質

定冠詞 the には確定の意味があり、特定の人或いはものを指す作用がある。ある名詞の前で定冠詞 the を付ける時、同種類中のほかの人或いはものを区別し、特定な一人或いは一つのものを表示する。また世界中で「唯一無二」の物事を表示する名詞の前に付けることもある。定冠詞 the の意味は中国語の“那个”（「その」）“这个”（「この」）と同じである。単数名詞と複数名詞だけではなく、不可算名詞の前にも定冠詞を付けることができる。

2.2 不定冠詞の意味と性質

歴史的意味から見れば、不定冠詞を持つすべての印欧語においては、不定冠詞は数詞 one からきていると言われている。一色（1954）が述べたように、現代英語の a／an は、古英語の ān よりきている。両者の用法は同様ではないが、その意味や位置において似かよったところもある。

2.3 無冠詞の意味と性質

無冠詞は名詞の前に冠詞を付けない形式である。無冠詞の場合は以下二つの状況がある。一つは固有名詞の前に本来は冠詞が付ける必要がないという形式である、もう一つはある名詞の前には冠詞が省略できる状況である。黄(2010)は「a/an+名詞」と「無冠詞+名詞」の意味の違いを考え、ある場合に冠詞が付けるか付けないかには境界線が明確ではない状況があると述べている。「無冠詞+名詞」は「不可算性、一般性、抽象性」を表すという言い方もできる。

3. 冠詞の「定」・「不定」・「特定性」という意義

庵（1994）は「定」と「不定」を定義する。「定」（definite）とは指示語（referring expression）と指示対象（referent）の関係が確定できるという意味である。それに対して、「不定」（indefinite）は指示語と指示対象の関係が確定できない状況である。

Ionin et al.（2004）は、冠詞選択に関わる素性に関して「definiteness and specificity（定性と特定性）」を導入し、Parrish（1987）や Thomas（1989）より明示的な定義を与える［±specific］と［±definite］に基づいた名詞句を分類している。［+definite］とは、話し手と聞き手が前提として名詞句で示された対象を唯一の存在として同定できるということ、［+specific］は、話し手が名詞句で示された対象を唯一のものとし、それは注目すべきものであるとみなしていると定義している。

3.1 第二言語習得における冠詞の習得

第二言語習得の場合で、水野（2000）が示唆しているように、母語と関連があり、目標言語について言語上の事実とコミュニケーション上の事実を意識的に注目し、理解することによって不確実性を減少しながら習得している。すなわち、冠詞習得の場合で、特定性（specificity）の概念に基づく冠詞の使用と冠詞の指導と言語情報で定性（definiteness）というものを理解し、母語からの転移が習得されると考える。

4. 調査結果

YAN(2019)に基づき、ここでは中国人留学生と日本人学生の冠詞を使う際の常に遭遇する問題をまとめる。YAN（2019）では、不定冠詞 a／an に関する言語資料を収集し、不定冠詞の使用法を研究した。言語資料の分析では、調査の結果を参考にして、不定冠詞の基本的意味を理解し、分類・整理する。初学者に実例として示し、習得させ、利用させ、さらに理解されやすいかどうかを分析する。

4.1 調査参加者

本研究(YAN, 2019)の参加者は 118 名の L1 日本語話者と 109 名の L1 中国語話者であった。英語レベルによって分類し、TOEIC が 450 点以上、TOEFL が 45 点以上あるいは TOEFL itp が 420 点以上の学生を選別した。L1 日本語話者と L1 中国語話者は各 90 人となる。

アンケートの項目は Ekiert（2007）と髙坂（2013）に従った。アンケートを通して、問題の正答率と誤答率を集計し、不定冠詞の誤答原因を分析した。

4.2 統計結果と分析

以下はアンケートのデータをまとめて、日本人学生と日本にいる中国人留学生の調査結果を示した表である。

表 1：日本人学生の情報―計 118 名

	一年生	二年生	三年生	四年生	修士 2 年生
工学部	32 名	50 名	2 名	0 名	0 名
法政経学部	3 名	12 名	2 名	2 名	0 名
理学部	1 名	0 名	0 名	0 名	0 名
教育学部	0 名	1 名	2 名	0 名	0 名

国際教養学部	1名	0名	0名	0名	0名
園芸学部	1名	0名	0名	0名	0名
人文公共学府	0名	0名	0名	0名	9名

表2：中国人留学生の情報―計109名

	学部生	研究生	修士1年生	修士2年生
千葉大学	5名	3名	14名	16名
岡山大学	5名	3名	3名	6名
北海道大学	0名	3名	7名	7名
熊本大学	0名	2名	4名	4名
城西国際大学	0名	0名	5名	8名
赤門会言語学校	14名			

表3が示すように第二言語英語を習得する時、熟達度は主に初学者、初級、初中級、中級、中上級、上級、超上級という七つレベルに分けられる。学生を英語レベルによって分類すると、初中級以上の学生が多いので、本研究は初中級以上の学生を選別し、調査対象とする。

日本人調査対象者の場合、TOEFL itpが420点以上（及び420点）或いはTOEICが450点以上（及び450点）の人を選別し、90人となる。この90人の中で、正答率と誤答率を再度集計する。

中国人調査対象の場合では、TOEFLが45点以上（及び45点）、IELTSが4.0点以上（及び4.0点）或いはTOEICが450点以上（及び450点）の人を選別し、90人となった。この90人の中で、正答率と誤答率を再度集計する。

表3

英語スコアレベル	英検	TOEIC	TOEFL itp	TOEFL	IELTS
超上級	1級	900-990	630-677	110-120	8.0-9.0
上級	準1級	750-895	580-629	98-109	7.0-8.0
中上級	2級	600-745	510-579	68-97	5.5-7.0
中級	準2級	450-595	420-509	45-67	4.0-5.5

初中級	3 級	200-445	360-419	32-44	3.0-4.0
初級	4 級	100-195	310-359	31 以下	3.0 以下
初学者	4 級以下	10-95	310 以下	なし	なし

4.3 [±definite, ±specific]について

まず、[+definite, +specific][-definite, +specific][-definite, -specific]という三種類に分けて、L1 日本語話者と L1 中国語話者の再度集計するデータの正答率と誤答率をまとめたのが表 4 である。

表 4

番号	定性	特定性	L1 日本語話者			L1 中国語話者		
			a／an	the	無冠詞	a／an	the	無冠詞
①	+definite	+specific	9.9%	79.5%	10.6%	11.2%	78.5%	10.3%
②	-definite	+specific	63.2%	17.6%	19.2%	73.6%	11.2%	15.2%
③	-definite	-specific	78.2%	15.3%	6.5%	75.9%	10.4%	13.7%

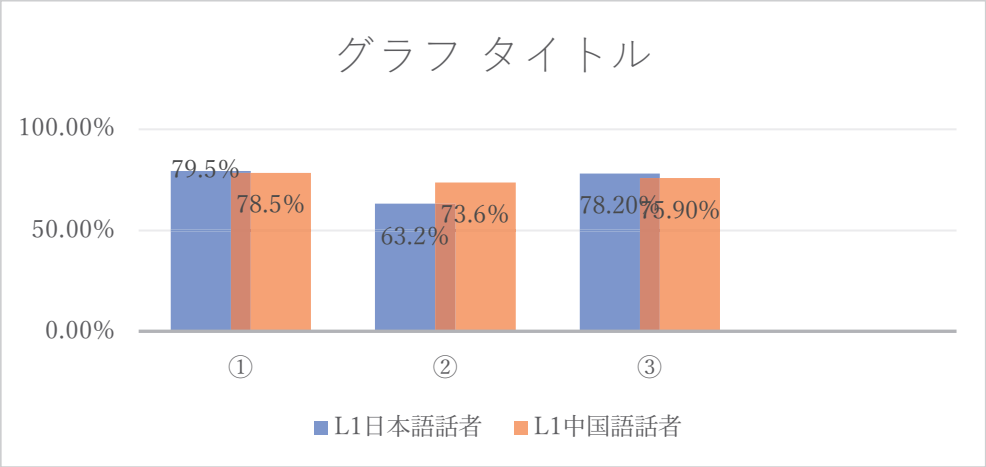

図 1：正答率の比較

表 4 と図 1 から見ると、[+definite,+specific]と[-definite,-specific]の場合、L1 日本語話者と L1 中国語話者の正答率はほぼ同数に近く、誤答率もほとんど一緒である。しかしながら[-definite,+specific]の場合、L1 日本語話者の正答率は 63.2%に対し、L1 中国語話者の正答率は 73.6%であった。そのため、L1 中国語話者は L1 日本語話者より a／an を使用する時の正答率が高いことがわかる。このことは中国語の量詞と数詞「一」を結んだ数量構造の形成に関係があるではないかと考えられる。

4.3.1 数詞「一」と量詞の組み合わせの機能について

戴（2018a）は日本語と中国語が持つ量詞機能の違いと名詞句の属性から、母語が中国語話者は母語が日本語話者に比べて、[-definite,+specific]の場合に、英語の不定冠詞 a／an をより正確に使えると述べている。そして、中国語の数量詞の機能は「計数機能」と「個体化機能」があり、「個体化機能」は指示物の数量をカウントする「計数機能」と異なっている。

大河内（1997）が指摘するように、「“一”＋助数詞」を付けることによって、類名や総称という抽象的かつ非可算的な事物を、具体的もしくは可算的な個別物に変える機能のことを意味する。英語の不定冠詞「a/an」は「一つ」の意味があり、中国語の数量詞は数詞「一」を使用することが多い。中国人が日本語を学習するとき、「一つ」を使うときが多い、これは中国語が「“一”+量詞」という使用方法がある原因である。

例 1 のように、英語と中国語で「a」と“一个”が使われる場合に、日本語では「一人」を使わない。

例 1. a. He is a teacher.
b. 他是一个教師。
c. 彼は(一人の)教師です。

例文の中で、英語と中国語の場合、例 1a の不定冠詞「a」と例 1b の数量詞“一个”により、名詞は総称性があるが、「a」と“一个”を加える場合に個体性を表現する。しかし、日本語の場合、例 1c は具体的人間を指し、個体性を示しているが、「一人」を付く必要がない。

「“一”+量詞」が特定的と総称的という 2 つの場合で、中国語では「“一”+量詞」を使い、日本語は数量詞を付けない。大河内(1997)が指摘したように、中国語の名詞が個別の具体的な事物に言及する場合、一般に数量詞を付く必要がある。そして、「“一”+量詞」が総称的である場合、以下の例文を見る。

例 2. 巴尔扎克**讲**，一个人不被女人**爱**是最令人悲惨的了。

(CCL[2])

「(1 人の)人間が女性に愛されないことが、最も悲惨なことであるとバルザックは言った。」

例 3. 把一个青年培养成有用的人才不是件容易事。

(王 1984, 55)

「若い男性を有用な人に訓練することは容易ではない。」

例 2 と例 3 の例文中、中国語は「一个（一個）」があるが、日本語に訳す時「一」をつける必要がない。そして、例 2 の主語は「人間」という総称表現であり、具体的に存在する人物ではない。例 3 の“一个青年”は具体的な青年を指すことではなく、すべての青年を代表している。この“一个”は不特定のものではなく、総称である。例 2 も同じ意味で、ある女性ではなく、すべての女性を指すことである。

以上の分析から、中国語の数量詞「“一”＋量詞」は英語不定冠詞の意味と非常に近い、「具体性」と「個別性」があることが明らかになる。一方、大河内（1997）が説明したように、「“一”+量詞」、「裸の名詞」、「定・不定」と「特定・非特定」では、次のような関係を持っている。

<table>
<tr><td rowspan="2">裸の名詞</td><td>Specific で definite</td></tr>
<tr><td rowspan="2">Generic</td></tr>
<tr><td rowspan="2">＜“一”+量詞＞名詞</td></tr>
<tr><td>Specific で indefinite</td></tr>
</table>

しかし、L1 日本語話者は、「“一”+量詞」という形式を使うことが少ない。そのため不定冠詞 a／an を使用する［-definite, +specific］の場合に、L1 中国語話者の正答率がより高い原因はこれと関係があるではないかと考えられる。

5. 不定冠詞の誤用分析

この節では主に不定冠詞誤用の原因を議論する。誤用分析方法は、誤用解釈に属している。

[2] 北京大学中国語言語学研究中心 CCL 言語資料庫

5.1 不定冠詞誤用の一般的根源―中間言語の特徴分析

Corder（1967）が示したように、学習者の間違いが母語の干渉というよりは、学習者自身が持っている潜在的な第二言語能力より生じるという視点が導入された。Corder（1971）はその能力を学習者固有言語(idiosyncratic dialects)と呼び、以下の内容を述べていた。

All idiosyncratic dialects have this characteristic in common that some of the rules required to account for them are particular to an individual. … It is in the nature of idiosyncratic dialects that they are normally unstable.

(Corder 1971,149)

Corder（1971）は、学習者固有言語は独立で自足しているシステムであるといえるが、目標とする第二言語の体系と異なることを述べている。Selinker（1972）はスペイン語母語話者、フランス語母語話者、インド語母語話者とロシア語母語話者を中心に、誤用の共通性が見られることを述べ、第二言語学習者はかなりの程度共通した言語体系を持っていると考えた。

Selinker（1972）は、この言語体系が学習者に固有で、習得段階に応じて変化することを指摘し、「中間言語（interlanguage）」と呼ぶ。中間言語と学習者固有言語はほぼ同じ概念を持っている。伊藤（2001）は学習者固有言語を4つのタイプに分けている：詩的方言（poetic dialect）、病理学的逸脱（pathological deviant）、母語習得過程にある子供の言語と言語学習者の言語である。中間言語と学習者固有言語の関係について、伊藤（2001:4）は「言語学習者の言語をinterlanguageと呼ぶことができる。これは不安定な習得途上の言語であり、言語学習者独自の文法規則を持っているidiosyncratic dialectsである。この学習者独自の文法がerrorsとしてinterlanguageの中に現れ、それは学習者の言語習得の程度を表す指標ともなっている。」と述べている。

Selinker（1972）は、人間の脳内は潜在的な言語体系があり、第二言語学習者が目標言語を習得していく過程で、その言語体系を参照しながら、目標言語とも母語とも異なる独自の言語体系を構築することを主張した。筆者は中間言語が一般的に学習者のもつ第二言語のための知識能力と考え、潜在的に存在するだけではなく、第二言語習得のため表面に現れる能力と考える。中間言語の化石化[3]は第二言語習得者の冠詞誤用に関するアンケート調査に現れる。中間言

[3] Selinkerは、中間言語において化石化（fossilization）が起こると指摘する。化石化はある言語項目や規則が誤って習得され、それがそのまま残っていることを示す。

語は一定の体系性を持つ[4]。長谷川（2002）が以下のデータを示している：英語専攻の大学1年生は、interesting や exciting を使った場合のミス（「an」とすべきところを「a」とするミス）を犯したのは30名中の2名（6.7%）である。学習者が不定冠詞を学習する際に、既に英語において不定冠詞を用いる必要があることに気づいてはいるが、実際に言語を運用する時に an を用いるべき場合に a と誤用することがあるなど、体系性のミスが現出することが分かった。

中国人学生の英語冠詞習得で表れた数詞「一」と量詞の組み合わせの機能は、中間言語の体系性という特徴に解釈することができる。Selinker は中間言語が「中間言語は母語を手掛りとして目標言語に向かって段階的に発達し，誤用は中間言語の形成に寄与する。」という主張があるが、筆者は中間言語の発展は段階的に発展するだけではなく、中間言語が不安定性を持っていて、絶えず発展していると思っている。時間とともに学習者は発展する一方、その発展は体系性だけではなく、中間言語から次の中間言語まで進んでいる過程は不安定性を持つと考える。学習者は勉強するうちにどんどん新しい情報を得ている。うまく新しい情報を得るため、既にあった構造の上で変えたりして、不安定性が生じたのだ。主に中間言語の不安定性は、時には正しく使われたり、時に間違えたりして、前後に不一致ということに現われている。特に、学習者がある規則に対して分かったように分からないような時には正にこのようである。

5.2 内的要因

この節では、学習者個人が主な原因となっていると思われる誤用について論じる。Selinker（1972）[5]に基づき、誤用の原因を主に五種類に分ける。一つ目は母語転移である。二つ目は言語内干渉である。三つ目はコミュニケーションストラテジーの間違いである。四つ目は訓練の転移で引き起こされる間違いである。五つ目は心理認知要素である。戴（2018b）が示唆したように、これらの原因は全て学習者自身と一定の関係があり、不定冠詞誤用の原因もこれと類似すると考えられる。この5つのうち、「コミュニケーションストラテジーの間違い」を除く4つの原因をここでは取りあげる[6]。

(1) 母語転移とは母語の内容を目標言語に転移することを指す。Lado（1964）は言語転移が第二言語習得の最も主要な要因と主張する。目標言語の規則をあまり知らないため、呉（2016）

---

[4] 中間言語には、以下の特徴があるといわれている：体系性、普遍性、浸透性、遷移性と変異性である。（『新版日本語教育事典』p.699）

[5] Selinker（1972）は中間言語を形成する要因として以下の5点をあげた。①過剰一般化②母語転移③訓練上の転移④コミュニケーションストラテジー⑤学習ストラテジー。

[6] 今回のアンケートの形式上の制限のために「コミュニケーションストラテジーの間違い」は触れていない。

の研究が示したように、学習者は母語の文法、音声、語彙などに基づいて機械的に目標言語のコンテクストに適用して、外国語の誤用を引き起こす場合がよくある。母語の転移の積極的な影響があるが、母語の負転移もあるため、筆者は第二言語学習者が第二言語を学習する際によく誤用が生じると考えている。また、筆者は母語の負転移による冠詞習得への影響は、日本語と中国語には冠詞という品詞がないために学習者が冠詞の省略という誤用を犯しやすいと思っている。アンケート調査の結果から見ると、学習者、特に初級・中級段階の学習者はまだ不定冠詞を使用する意識と習慣を完全に形成していないため、目標言語を使用する過程において冠詞を比較的に漏らしやすい。このような誤用は主に言語間の誤用であり、Corder（1971）とRichards（1971）は、母語の言語規則の特徴による妨害で引き起こされる目標言語使用のミスであり、主に母語の負転移に帰するとした。このような誤用は学習者が目標言語に対する把握、習熟度の向上に従って次第に減少する。Butler（2002）は、日本人英語学習者の冠詞誤用を分析し、研究の結果によると、習熟度が低い学習者は、教科書や授業で勉強した規則のみを適用し解答をした。習熟度が上がると、文脈をより正確に考慮しながら、冠詞の使い分けが出来るようになる傾向が見られた。そのため、このような意識的な学習反復によって、無意識的あるいは自覚的な行為に転化することができ、学習者にとって、間違えることはその文法項目や表現の使い方を無意識的に試していることであり、母語の発想を転移した結果が誤用になり、再びこのようなミスを犯さないのが普遍であることと思っている。

(2) 言語内干渉で引き起こされる誤用という認識は、誤用分析の重要な要素の一つである。学習者が外国語習得の過程でおきる大部分の誤用は、言語内干渉で引き起こされる誤用すなわち学習者が正しく学習していない場合、あるいは全面的には学習していないために、奥野（2005）はオドリン(1995)の定義を基づき、以下のように定義して用いる。

言語転移とは、母語やそれ以外にこれまで学習した言語と,目標言語の類似点及び相違点から、学習者の意識的・無意識的な判断により、目標言語の運用上や,習得の過程上に現れる影響のことである。

（奥野 2005,21）

これらの誤用は学習者が持つ有限の目標言語の移入による誤った仮説から生じる誤用であり、正常な言語発展課程での誤用と見なすことができる。Richards（1971）はこれを「発展性誤用」と呼ぶ。不定冠詞誤用に対するデータ統計と分析及び上述した誤用原因を通じて、冠詞の誤用が生じる原因を以下のように大まかにまとめることができる。

概念仮説誤用：Richards（1971）によれば、概念仮説誤用が反映しているのは、学習者がまだ目標言語の言語規則を完全に把握してはおらず、ないし誤解が存在することにある。例えば、アンケート問題の一つ「The inventor is really an Edison of our time.」において、日本語と中国語に冠詞がないからかも知れないが、受験者はEdisonが人名であり、固有名詞であるため、その前に何の限定も加えるべきではないと考えたからかも知れない。だがここでEdisonは既に人名ではなく、一種の代表としての象徴である。

過剰般化：Selinker（1972）が述べたように、第二言語を習得する時、誤用要因の一つは既習文法規則の過剰般化である。学習者が目標言語の構造によって概括して作る誤りの構造である。不定冠詞を使用する時、学習者は目標言語のある冠詞使用の規則によって、不定冠詞を使用すべきではないところに使用し、冠詞リダンダンシーの間違いを犯しやすいと思う。例えば、学習者がよく午前、午後を昼の「noon」を使う。このような間違いも規則制限の無知と関係がある。学習者がある規則を理解したが、当該規則に何らかの制限があるかについてはっきり把握していないため、使用中に誤用が現われるのである。

(3) 訓練の転移はTransfer of trainingと言える。Richards and Schmidt（1985）はこのような誤用を誘発された誤りと呼ぶ。誘発された誤りは前二項の誤用と重なっているが、主に環境によって引き起こされる誤用である。松林（2008）は、現在の中等教育で行われる語彙・文法指導の一部が、今なおこの誘発された誤りの原因になる可能性を示唆した。すなわち誤用のある参考書を採用したり、あるいは教授法が不適当であったりすることで引き起こされる学習者の誤解を指す。特に異なる二つの意味の単語あるいは二種類の異なる言語を詳しく比較対照すると、かえって学習者をもっと混乱させてしまう。そのため、訓練の転移は、リダンダンシー誤用を引き起こす原因の一つとなることを考えている。学習者が冠詞を学習する時に、絶えず冠詞の使用意識を強化した結果、一部の学習者が冠詞過剰使用を起こし、和泉・斎賀・Thepchai・内元・井佐（2003）が示唆したように、中級レベル以上になると、目標言語に対してより分析的になり、習得が難しい冠詞の存在を強く意識し過ぎるあまり、冠詞の過剰使用が起こりやすい。

(4) 学習者の心理認知要素である。ここでは主に中国人留学生と日本人学生の不定冠詞学習に対する動機と興味に現われる。

5.3 外的要因

先行研究とアンケート調査結果の分析から、不定冠詞の重要性を意識していない中国人留学生と日本人学生が沢山いることがわかった。これは教育と関係があると思われる。山岸が「こ

れで良いのか、日本の英語教育-不定冠詞が使えない英語専攻生たち」という論考において、ある大学の英語専攻の学生を訳させた不定冠詞を正しく使っていない学生が多数を占めたと報告している[7]。関口（2013）では、高校用文部科学省検定済教科書で冠詞の使用状況を調査した。教科書の中から 51 冊を対象とした。この中で、冠詞を個別に言及する教科書は 4 冊であった。この調査では、大部分の教科書が冠詞を文法項目として言及し、冠詞の用法に関する記述が少ないことがわかった。

筆者は誤用の原因を探究することが冠詞習得研究を行う最終目的ではなく、第二言語学習者と教師は英語学習者の言語習得過程や外国語の教授方法を充分に理解することは、言語教育に大きな啓発をもたらすものが沢山あると考える。これまでの検証と考察から、学校における英語学習者の不定冠詞習得過程ついて、筆者の有限な目標言語知識なりに絶えず仮説検証を行い、試験の際に誤用が沢山生じることを明らかにできたと考える。

6. 終わりに

6.1 まとめ

①L1 日本語話者と L1 中国語話者が冠詞を使用するとき、常に誤用が生じる。先行研究の内容を通して、母語に冠詞が持たない日本人と中国人にとって、冠詞の使用は非常に困難なことであることが分かった。

②アンケートのデータから見ると、日本にいる中国人留学生と日本人学生両方とも、定冠詞を使用する時は正答率が高い。しかし不定冠詞と無冠詞を使用する場合には常に誤用が生じている。［+specific, -definite］の場合、中国人留学生の正答率がより高い結果であった。L1 中国語話者が中国語を話す時、「一＋数量詞」を使うケースが多いからである。例えば、this is an apple を中国語に翻訳すれば、“这是一个苹果”になる。日本語に翻訳するとき、「これはリンゴである」になる。この状況下で、L1 日本語話者は英語冠詞を選択すると、その回答が無冠詞になる可能性が高くなる。

③不定冠詞の誤用について、一般的根源以外、母語転移、言語内干渉、コミュニケーションストラテジーの間違い[8]、訓練の転移で引き起こされる間違いと心理認知要素という 5 つの第二言語学習者自身に起因する要因もある。

④アンケートの結果を通して、冠詞の使用については、教育の一環だと考えられた。現在、

---

[7] 山岸勝榮英語辞書・教育研究室（http://jiten.cside3.jp/）

[8] 注 6 参照。

日本と中国では英語教育をさらに重視している。学習者の冠詞習得能力を向上させるためには、教育の場からの対策改善を考える必要があると考える。

6.2 今後の研究における展望

今後の研究は不定冠詞だけではなく、冠詞とほかの限定詞の関係を研究し、冠詞誤用を分析する予定である。そして、さらに調査対象者の範囲を広げて、「英語専攻」と「非英語専攻」の学生を中心に冠詞の誤用を探究したいと考えている。

参考文献

日本語文献

庵功雄（1994）「定性に関する一考察 ： 定情報という概念について」『現代日本語研究 1』、pp. 40-56.

一色マサ子（1954）『英文法シリーズ 9―冠詞』研究社.

伊藤千寿（2001）「中間言語と誤答分析―言語習得臨界期の年齢にある日本語話者の英語習得過程―」『岩手大学英語教育論集』3 号、pp. 3-13.

大河内康憲（1997）「量詞の個体化機能」『中国語の諸相』白帝社、pp. 1-13.

奥野由紀子（2005）『第二言語としての日本語習得過程における言語転移の研究―「の」の過剰使用を中心として―』風間書房.

呉　蘭（2016）「日本人英語学習者のエラーについて」山形大学紀要（教育科学）第 16 巻 第 3 号、pp. 205-217.

関口智子（2013）「英語の冠詞習得に関する一考察―明示的文法指導の効果をめぐって―」『研究資料集』21 号、pp. 59-68.

髙坂京子（2013）「冠詞が映し出す英語の世界－定冠詞・不定冠詞・無冠詞が表すもの－」『表現学会 50 周年記念大会』、pp. 80-90.

テレンス・オドリン（1995）丹下省吾訳『言語転移』リーベル出版.

戴愛玲（2018a）『日本語母語話者と中国語母語話者による英語冠詞の使用状況と誤用分析―不定冠詞を中心に―』千葉大学大学院人文公共学府 2018 年度修士論文.

戴愛玲（2018b）「第二言語として習得される英語冠詞の使用状況と語用分析―日本人と中国人の実例の対象研究」千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書 2018、pp. 19-25.

長谷川芳典（2002）「英語が使える日本人再考」『岡山大学文学部紀要』38、pp. 41-76.

松林城弘（2008）「中等教育における語彙学習の役割：Have に焦点をあてて」『言語と文化・文学の諸相』岩手大学人文社会科学部欧米研究講座.

水野光晴（2000）『中間言語分析―英語冠詞習得の軌跡』開拓社.

和泉絵美・齋賀豊美・Thepchai Supenithi・内元清貴・井佐原均（2003）「エラータグ付き日本人英語学習者発話コーパスを用いた－学習者の冠詞習得傾向の分析－」言語処理学会 第 9 回年次大会 発表論文集、pp. 19-22.

YAN JINYI（2019）『英語における不定冠詞の使用方法について－日本に滞在する中国人留学生と日本人学生を研究対象に－』千葉大学大学院人文公共学府 2019 年度修士論文.

中国語文献

黄小萍（2010）「英语冠词省略的现状及其成因」（「英語冠詞省略の現状と原因について」）『北京第二外国語学院学報』第 2 期、pp. 22-28.

劉偉（2013）「浅谈英语中不定冠词的几种用法」（「英語の不定冠詞の数種用法について」）『科技視界』第 29 期、p. 161.

王還（1984）「“把”字句和“被”字句」（『「把」文と「被」文』上海教育出版社

英語文献

Butler, Y.（2002）*Second language 1earners' theories on the use of English articles: An ana1ysis of the metalinguistic know1edge used by Japanese students in acquiring the English article system.* Studies in Second Language Acquisition, 24 pp. 451-480.

Corder, S.P.（1967）*The Significance of Learner's Errors.* International Review of Applied Linguistics, 5 pp. 161-169.

Corder, S.P.（1971）*Idiosyncratic Dialects and Error Analysis* . International Review of Applied Linguistics in Language Teaching, 9 pp. 147-160.

Ekiert, M.（2007）*The Acquisition of Grammatical Marking of Indefiniteness with the Indefinite Article a in L2 English.* Teachers College, Columbia University Working Papers in TESOL & Applied Linguistics, 7(1) pp. 1-43.

Huebner, T.（1979）*Order-of-acquisition vs. Dynamic paradigm: A comparison of method in interlanguage research.* TESOL Q. 13（1）pp. 21-28.

Ionin, T. Ko, H.&Wexler, K.（2004）*Article semantics, in L2 acquisition: The role of specificity.* Language Acquisition, 12 pp. 3-69.

Lado, R. (1964) *Language Teaching: A Scientific Approach*. New York: McGrawHill.

Parrish, B.A. (1987) *New Look at Methodologies in the Study of Article Acquisition for Learners of ESL*. Language Learning, 37(3) pp. 361-383.

Richards, J.C. (1971) *A Non-Contrastive Approach to Error Analysis*. English Language Teaching Journal, 25 pp. 204-219.

Richards, J. and Schmidt, R. (1985) *Longman dictionary of language teaching and applied linguistics*. Longman.

Selinker, L. (1972) *Interlanguage*. Product Information International Review of Applied Linguistics in Language Teaching, 10 pp. 209-241.

Thomas, M. (1989) *The acquisition of English articles by first-and second-language learners*. Applied Psycholinguistics, 10 pp. 335-355.

（えん　しんい・千葉大学人文公共学府博士後期課程）

How to use indefinite articles in English
-For Chinese and Japanese students staying in Japan-

YAN JINYI

Summary:

In this literature, previous research has found that L2 English learners whose L1 do not have articles feel difficulty in choosing a correct article. Studies have shown that L2 learner errors are not random but limited by definiteness and specificity in a given semantic context. Then, interlanguage and idiosyncratic dialects are important to L2 English learners. Data analyses show that we should to be concerned with the individual differences and external effects among L2 learners. Individual differences are divided to five points. They are language transfer, language interference transfer, strategies of communication, transfer of training and psychological cognitive element. Transfer of training is also called induced error. Finally, we have noticed the influence of education on articles and propose that the acquisition of indefinite articles in English is even more important.